

重症心不全治療の現状

— 補助人工心臓 (LVAD) 治療の可能性 —

いつも国循の診療にご協力いただき、誠にありがとうございます。当院での心臓移植症例数が2105年3月に70例に達しました。また重症心不全に対する補助人工心臓治療にも積極的に取り組んでいます。

心原性ショック症例 (AMI・劇症型心筋炎) に対するLVAD治療

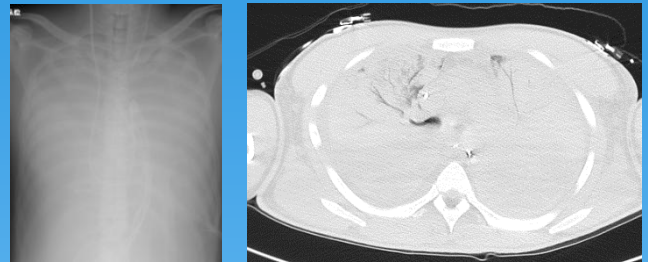
LVAD治療は若年の心筋症症例を対象とし、心臓移植までの橋渡し治療として行われることが一般的です。

国循では広範心筋梗塞や劇症型心筋炎により心原性ショックに陥り、PCPS・IABP依存状態となった症例に対しても積極的にLVAD治療を導入し、従来の治療では救命困難な症例を救命しています。

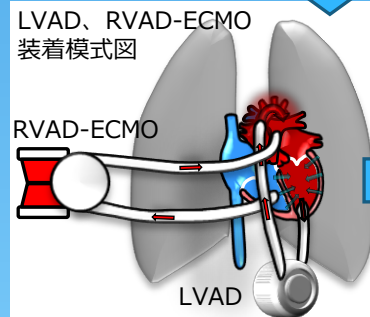
症例提示

20歳台の男性。劇症型心筋炎による心原性ショック症例。転院時、自己心は動かず、CHDF装着中で長期のPCPS管理により著明な肺水腫と、肝障害 (T-Bil : 6.2mg/dl) を呈していました。

転院後、LVAD (体外式) とRVAD-ECMO (右図参照) 装着を行いました。当初は自己心の回復を期待しましたが、心筋炎による心筋傷害が非常に強く、最終的には心臓移植適応と承認され、両心室補助人工心臓治療を経て、植込型LVAD装着下に自宅退院されています。



転院時胸部レントゲン、CTでは著明な肺水腫を呈していました



LVADポンプを右室、左室の両心に装着



急性期のLVAD、RVAD-ECMOから慢性期に体外式LVADポンプを右室、左室に取り付けることで両心室補助を行いました。

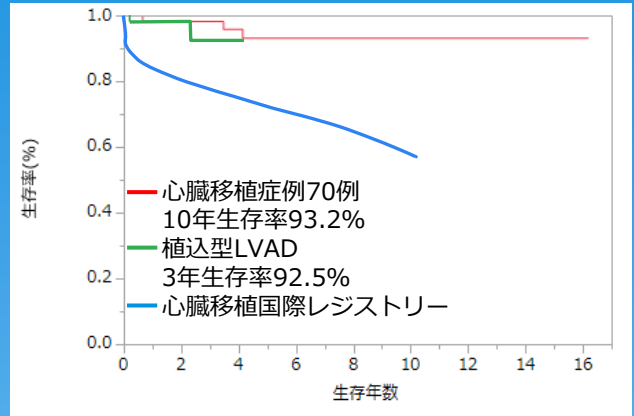


現在は植込型LVADに切り替え、自宅にて元気に過ごされています (在宅心臓移植待機)。

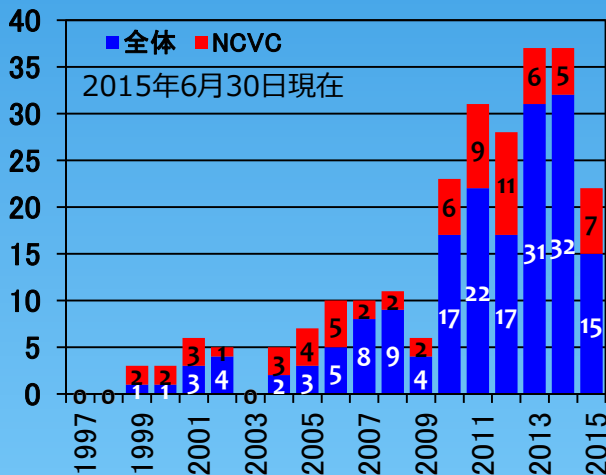
—心臓移植症例数は70例に達しました！—

国循での心臓移植症例数が4月に70例に達しました。国内心臓移植数は増加しているものの、心臓移植患者数も増加しているため、現在は3年以上の待機期間が見込まれており、多くの待機患者はLVAD装着下に在宅での待機生活を送られています。

国循心臓移植症例生存率 心臓移植国際レジストリーとの比較



国内及び国循における心臓移植数年次推移



国循移植症例の予後は非常に良好であり、約7割の患者様方が復職あるいは主婦として社会や家庭に戻られています。

*参考として国循での植込型LVAD患者の生存率を示しておりますが、移植後患者同様に良好であり、一部の方は職場や学校に復帰されています。

お気軽にご相談ください

- 65歳未満で、心不全や難治性不整脈により入退院を繰り返す症例
- 強心剤からの離脱困難症例
- 若年心筋症症例：心臓移植、LVAD適応の有無についてのスクリーニング目的での紹介もお受けいたします。

連絡先： 国立循環器病研究センター 移植医療部医師へつないでください

- 電話番号：06-6833-5012(平日), 06-6833-5015 (休日)
- FAX番号：06-6872-8160, e-mail: oseguchi@hsp.ncvc.go.jp

***広範囲心筋梗塞や劇症型心筋炎にて心原性ショックを呈する症例などの緊急症例にも可能な限り対応いたします。**

当院ホームページ：

